

#### 4. 景観構成要素による重点地域及び周辺部の類型化

ある地域を優占的な地物によって大別すると、市街地（商業地、住宅地等を含む）、住宅団地、工業地、農地（集落、水田、畑、果樹園等を含む）、草地（自然草原、放棄耕作地、牧場、ゴルフ場等を含む）、樹林地（山林、海岸防風林、社寺林等を含む）、水域（河川、溜池、ダム等を含む）になる。また、樹林は自然さの程度によって、自然林、二次林、植林に、相観（優占種が表す植物群落の外観）によって、照葉樹林（常緑広葉樹林）、夏緑樹林（落葉広葉樹林）、針葉樹林にわけられる。さらに、地形的には海岸・沿岸、平野、丘陵、山地等に区分される。これら優占的地物、植生自然度、相観、地形等の景観構成要素によって地域景観が形成される。

景観構成要素を自然景観構成要素 1（自然裸地）、同 2（海岸風衝草原）、同 3（海岸自然林）、同 4（山地自然林）、重点地域特有の景観構成要素、里地里山景観構成要素 1（二次林、植林）、同 2（耕地等）で類型化すると表 3-2 のようになるが、これを要約すると表 3-1 の様になる。なお、里地里山景観構成要素 1 及び同 2 は、大なり小なりどの類型にも含まれる。

表 3-1 景観構成要素の概要

	第 1 類型	第 2 類型	第 3 類型	第 4 類型
自然景観構成要素 1（自然裸地）	有り	無し	無し	有り
自然景観構成要素 2（海岸自然草原）	有り	無し	無し	有り
自然景観構成要素 3（海岸自然林）	有り	微少	無し	無し
自然景観構成要素 4（山地自然林）	無し	有り	無し	無し
重点地域特有の景観構成要素 (自然植生・二次植生)	部分的に 有り	部分的に 有り	部分的に 有り	有り
里地里山景観構成要素 1（二次林等）	微少～有り	有り	有り	有り
里地里山景観構成要素 2（耕地等）	微少～有り	有り	有り	有り

表 3-2 景観構成要素による重点地域間の類似性

表中記号 ●：分布面積大，◎：同中，○：同小

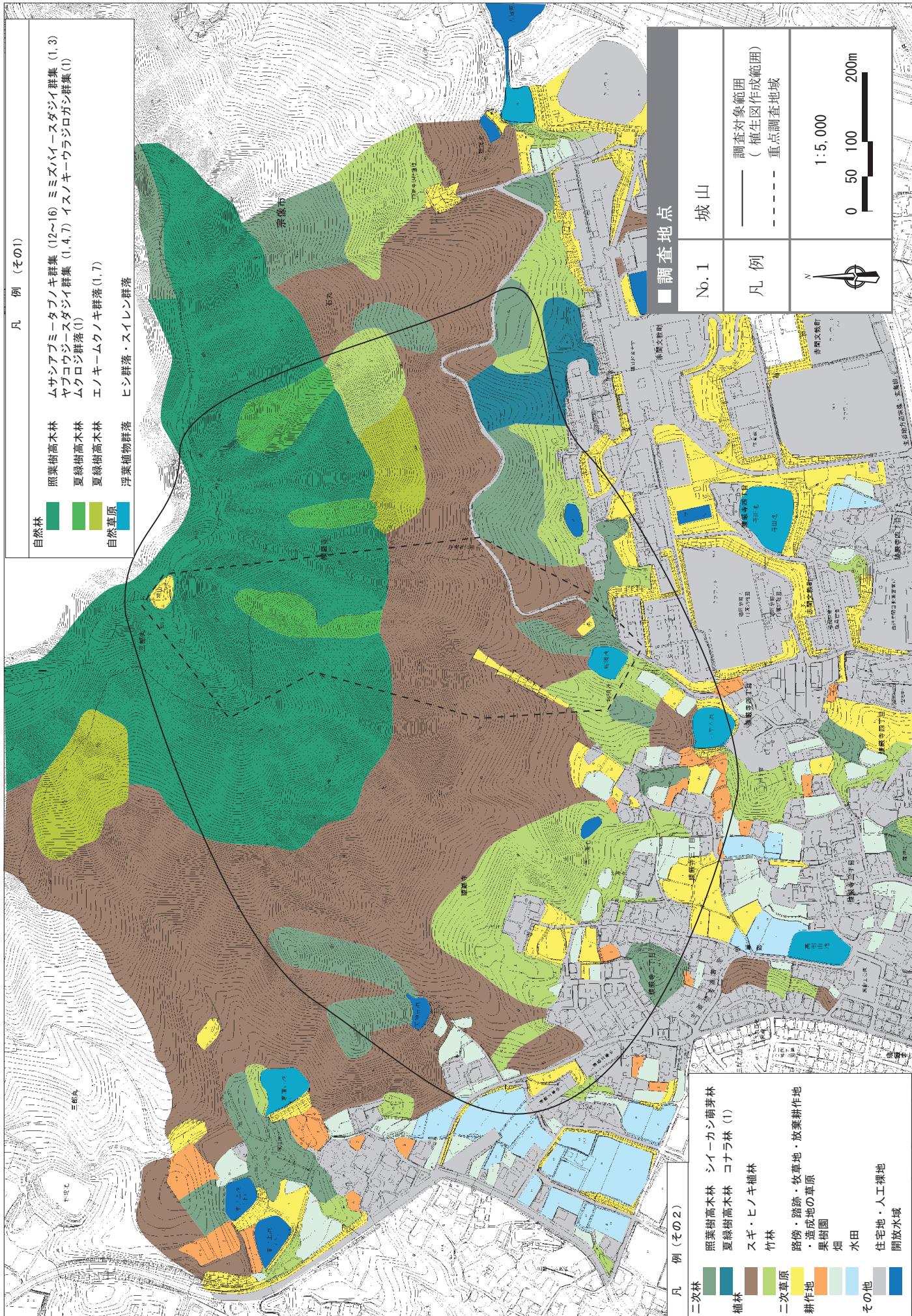
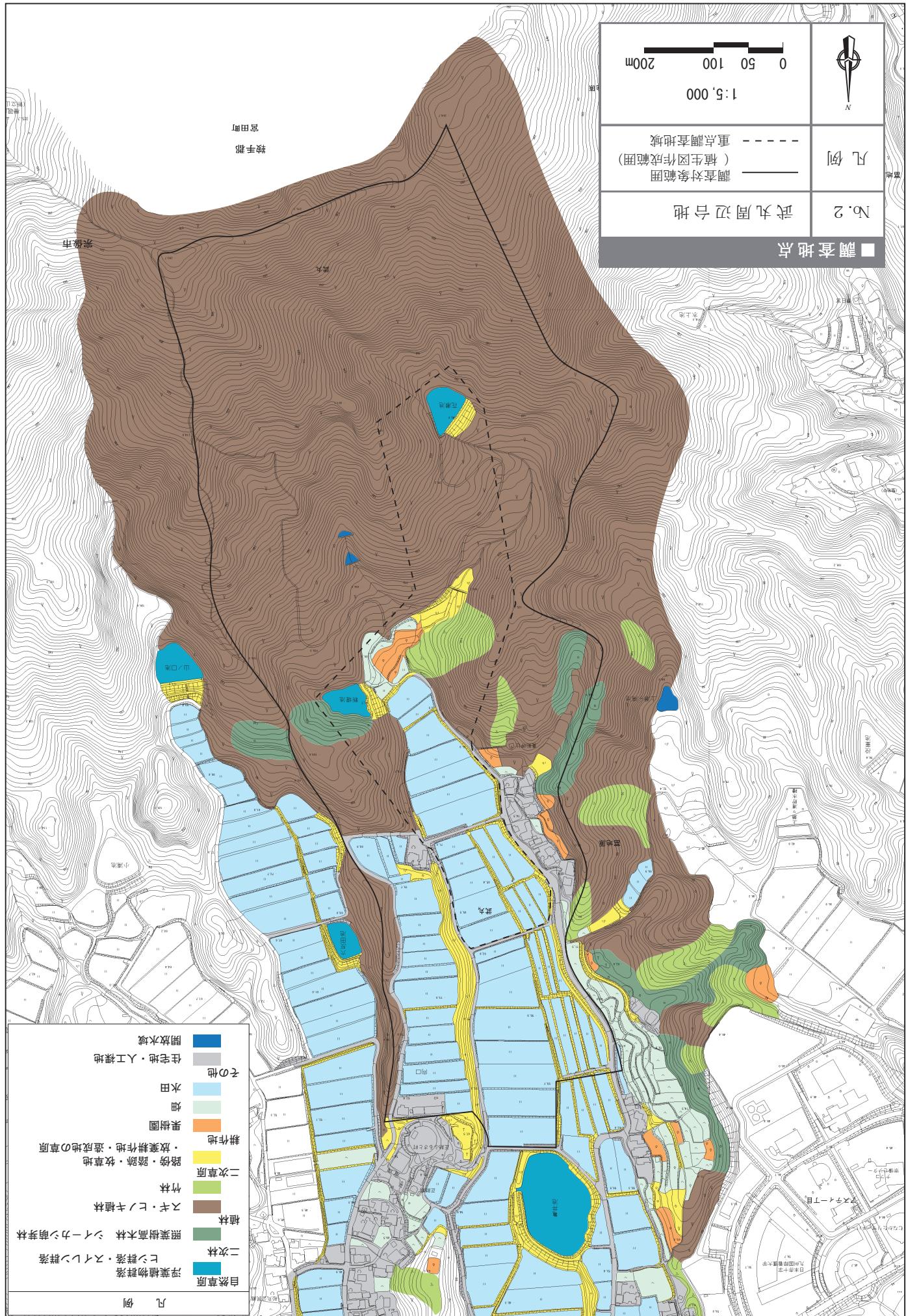


図3-2 宗像市の重點調査地域 (No. 1 : 城山)



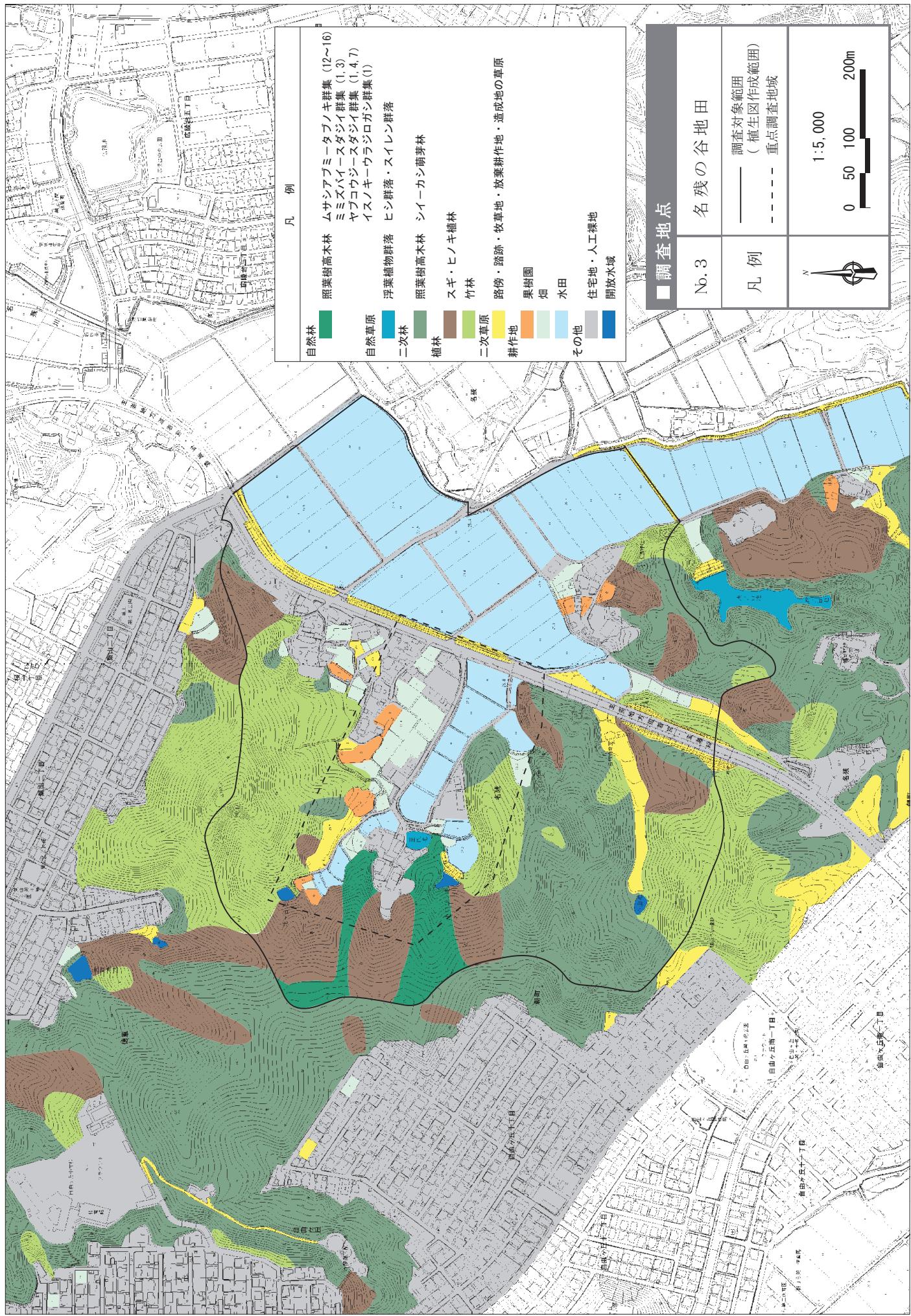


図3-4 宗像市の重点調査地域 (No. 3 : 名残の谷地田)

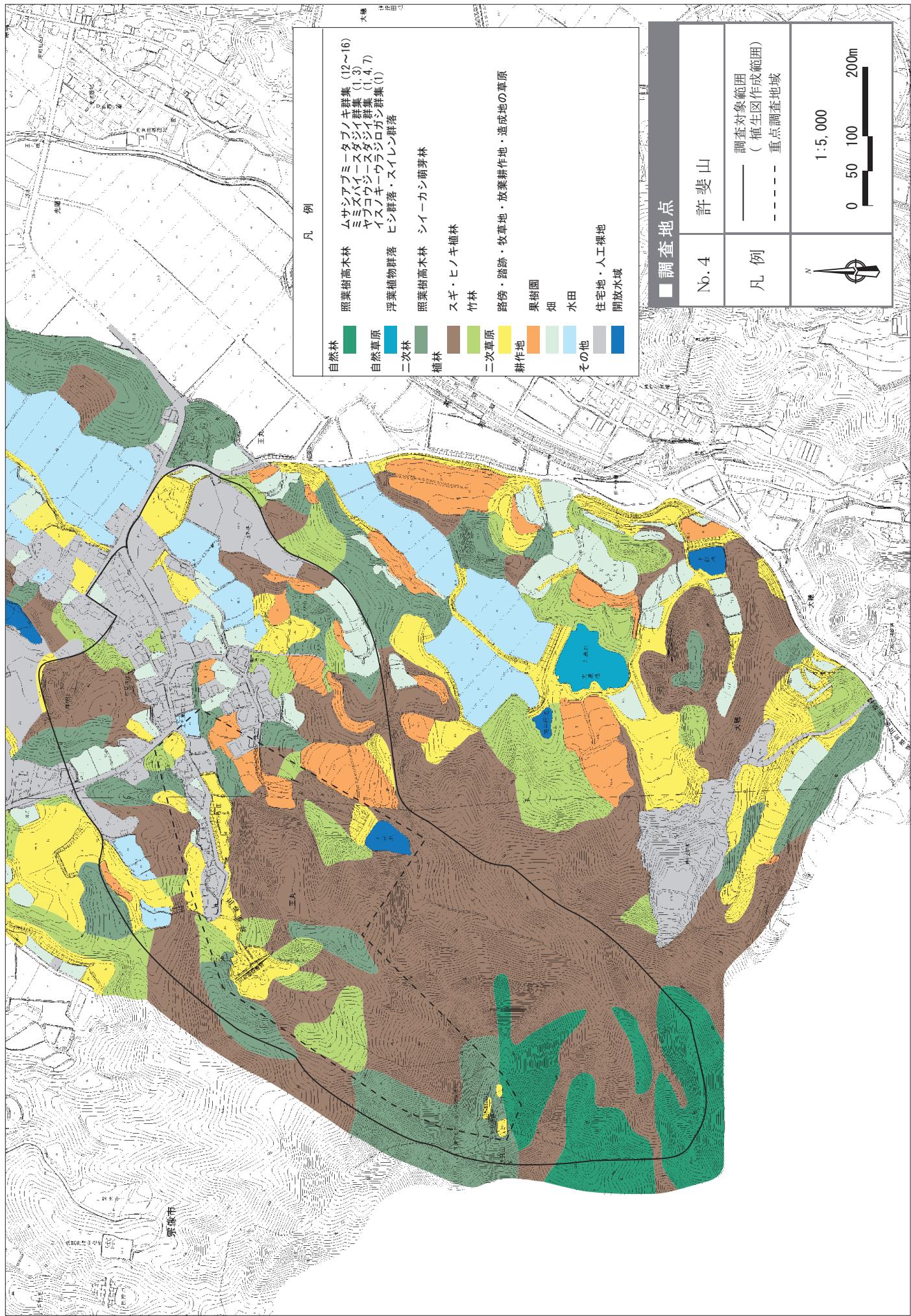


図3-5 宗像市の重点調査地域 (No. 4 : 許斐山)

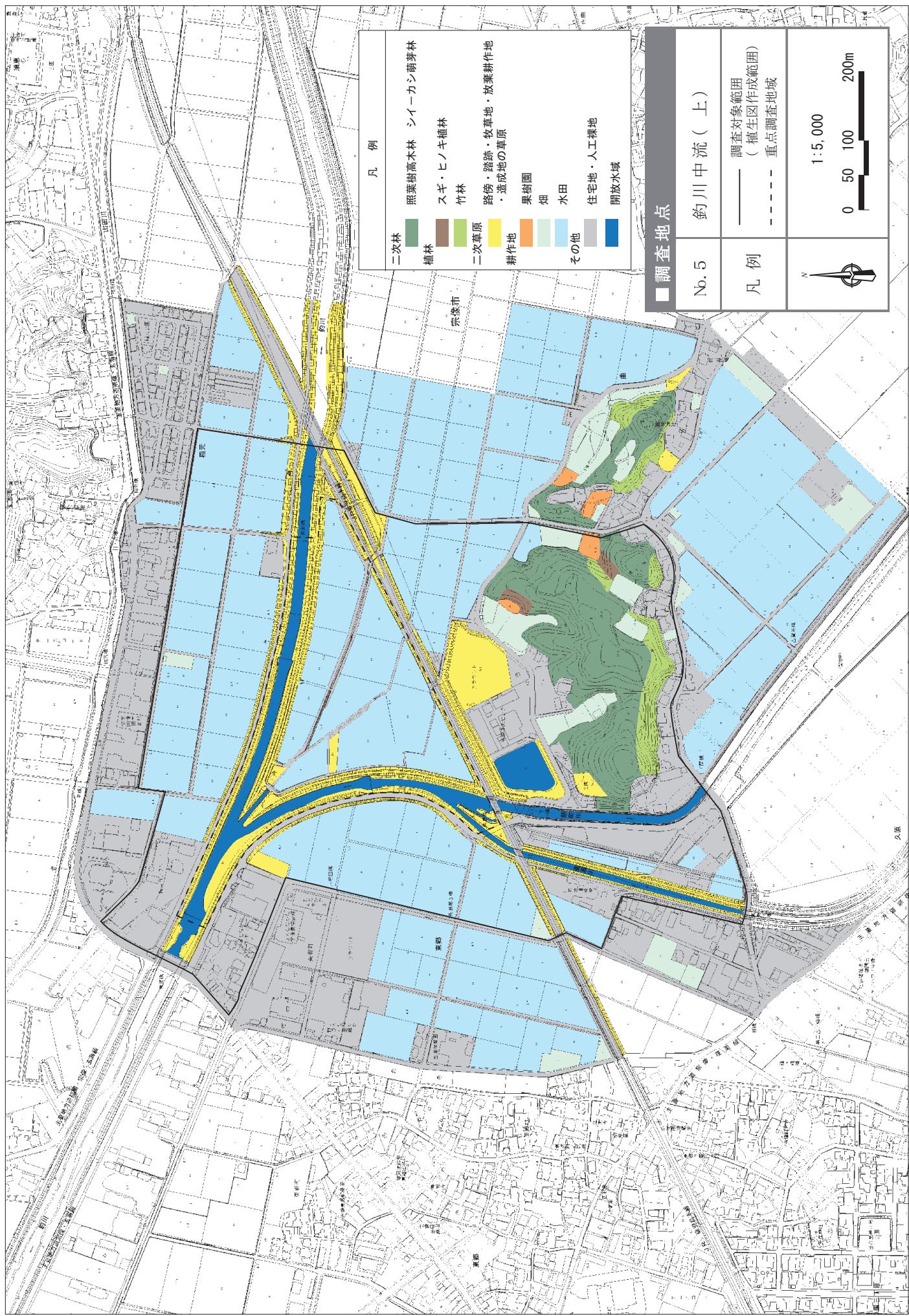


図3-6 宗像市の重点調査地域 (No. 5 : 許斐釣川中流 (上))

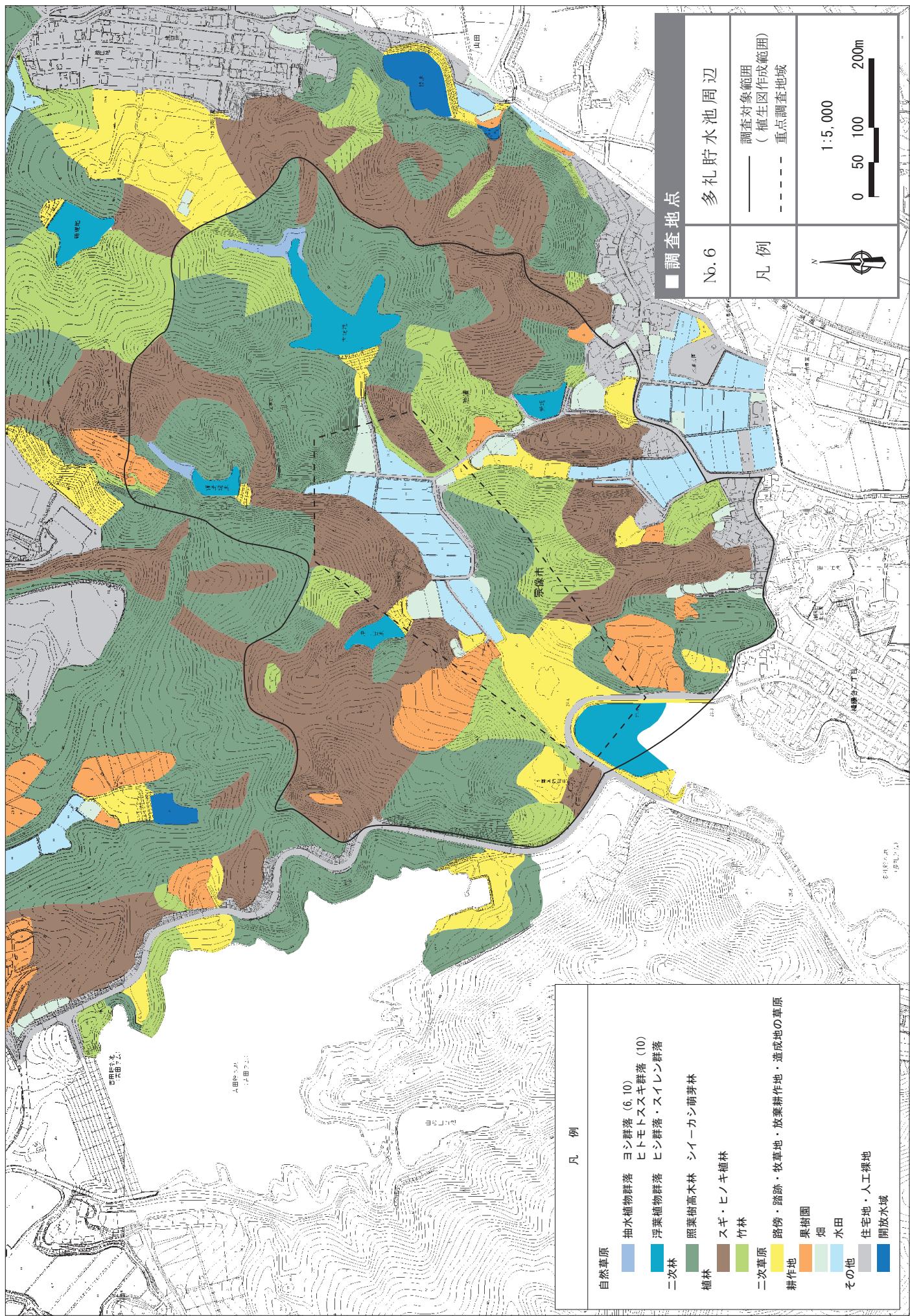


図3-7 宗像市の重点調査地域 (No. 6 : 多礼貯水池周辺)

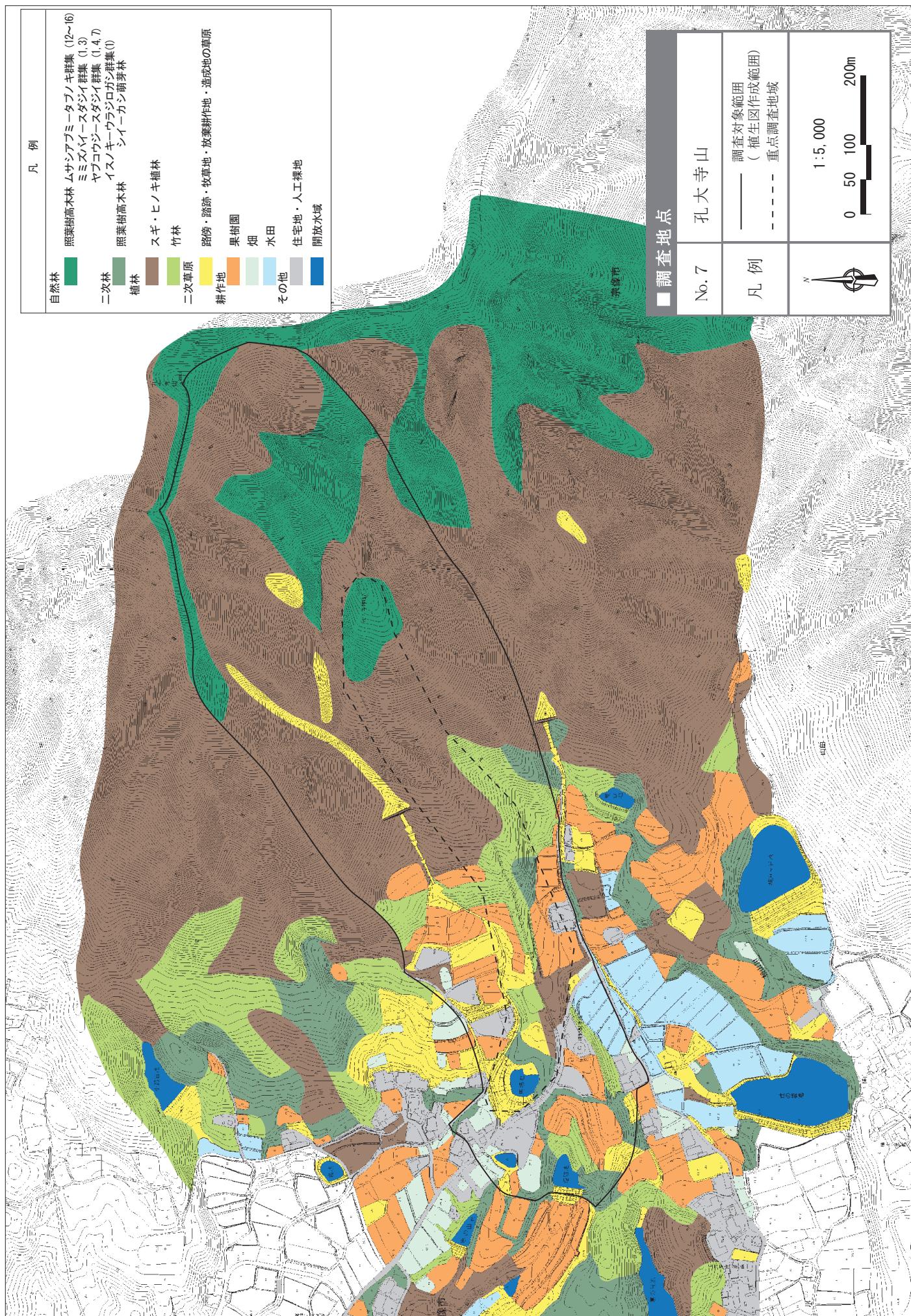
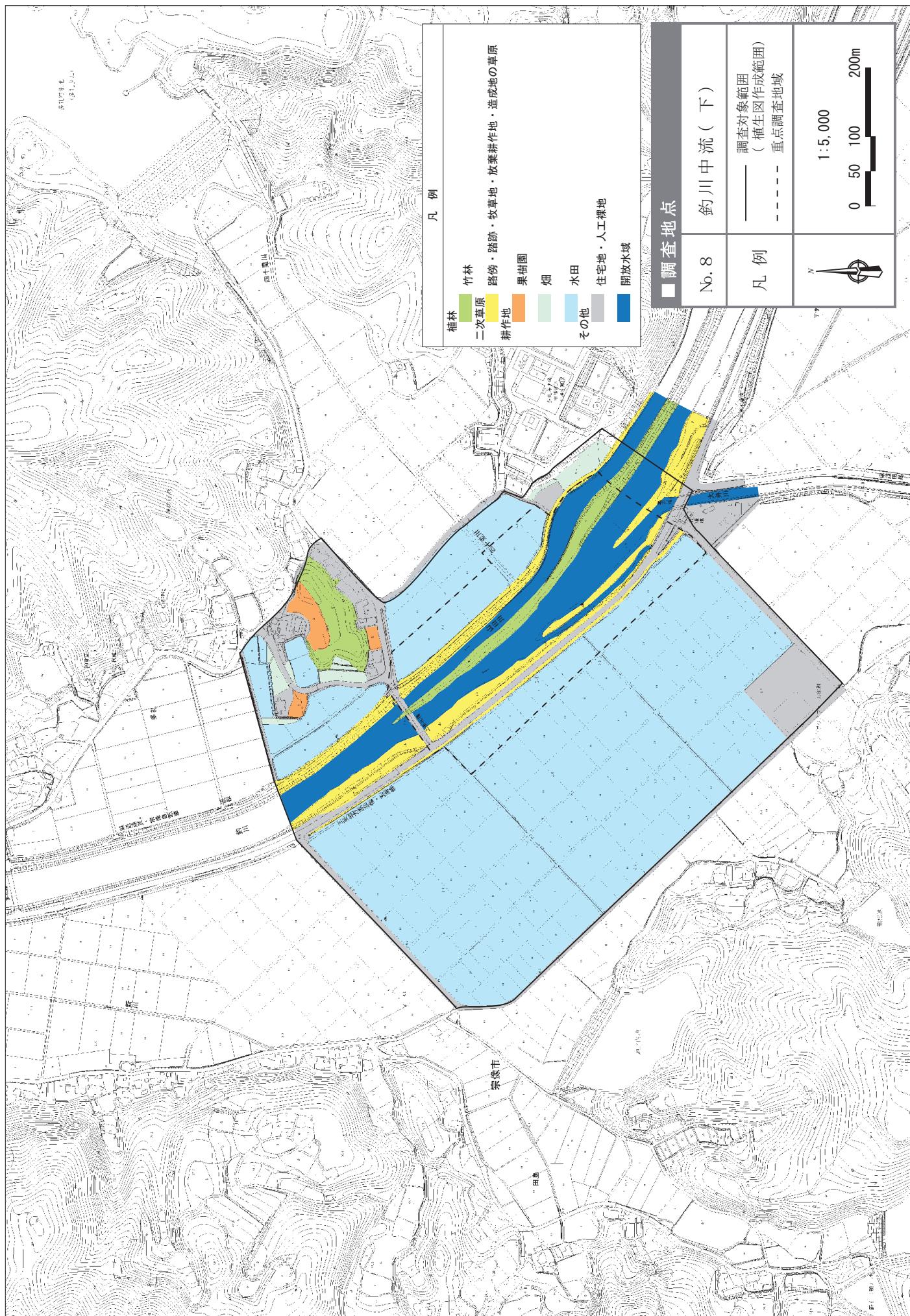


図3-8 宗像市の重点調査地域 (No. 7 : 孔大寺山)



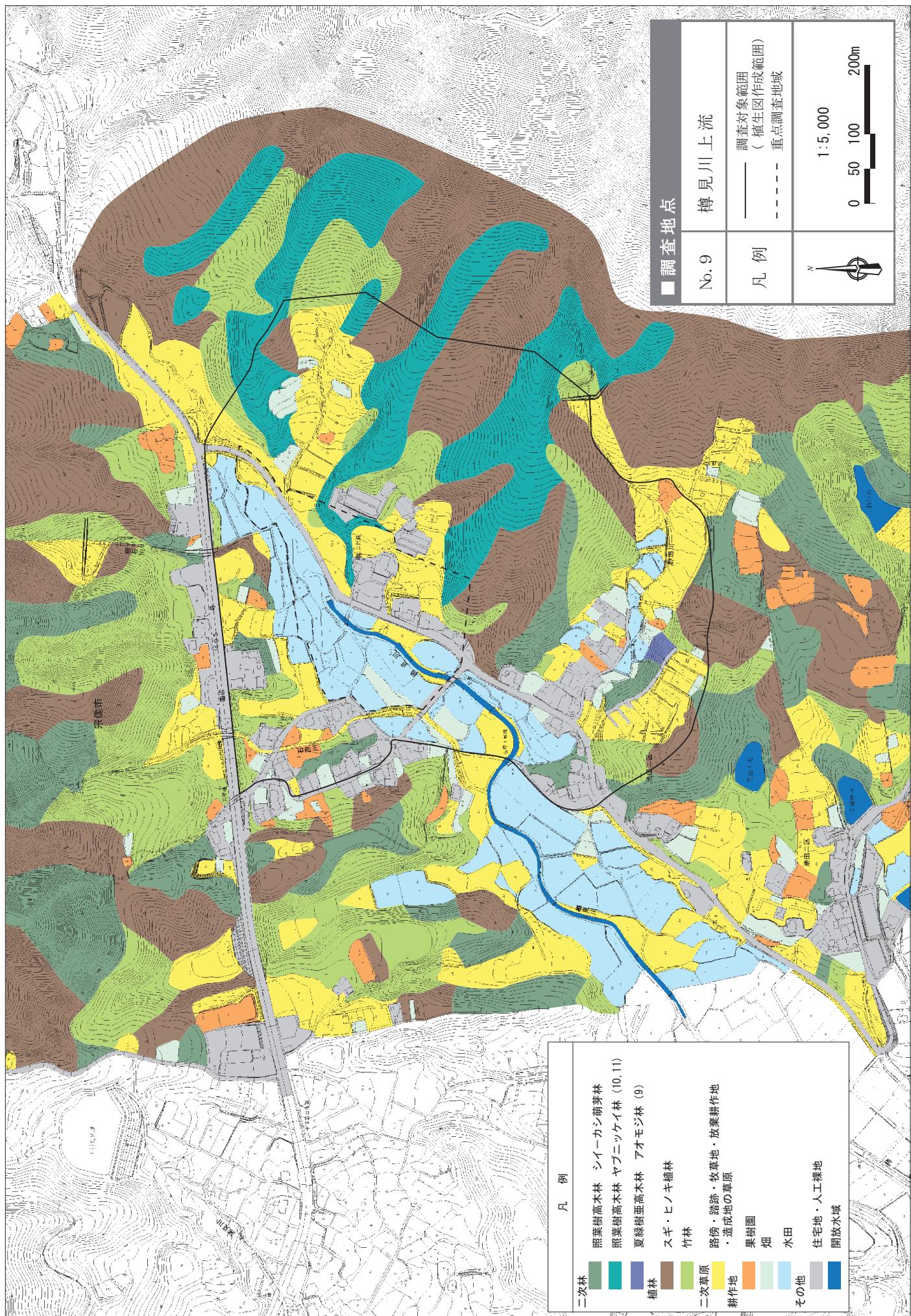


図3-10 宗像市の重点調査地域 (No. 9 : 樽見川上流)

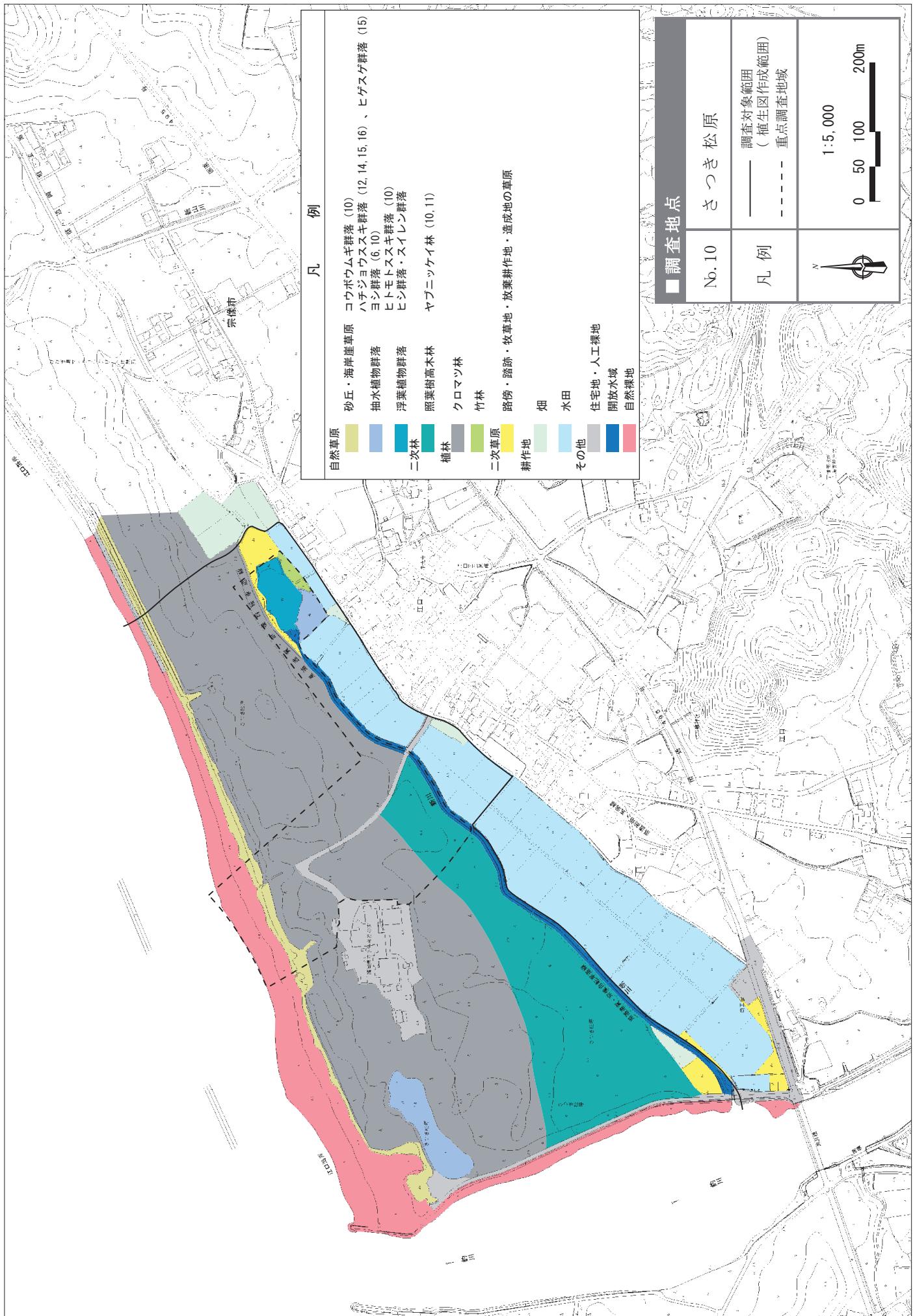


図3-11 宗像市の重点調査地域 (No. 10 : さつき松原)

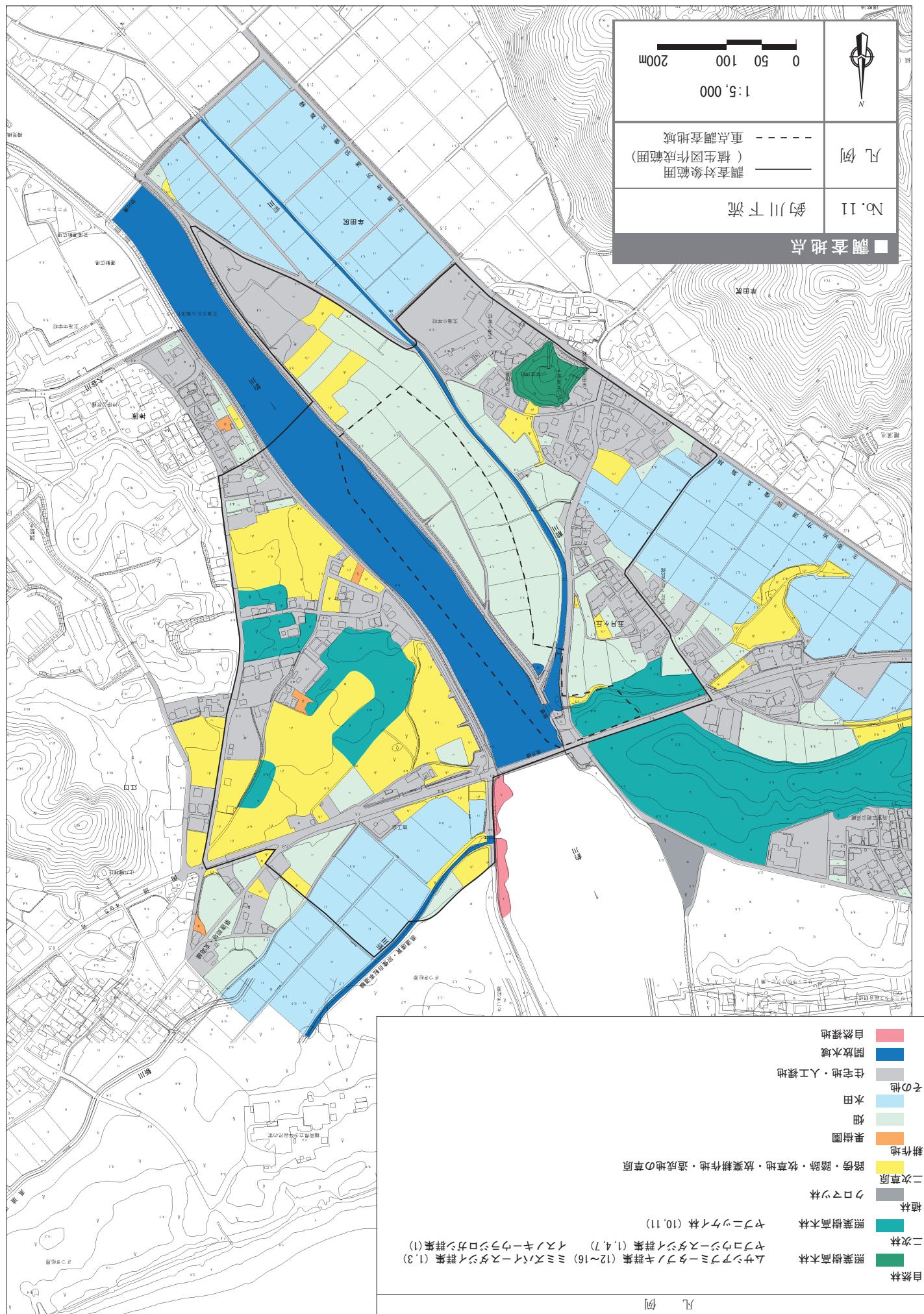


図3-12 宗像市の重点調査地域（No. 11：釣川下流）

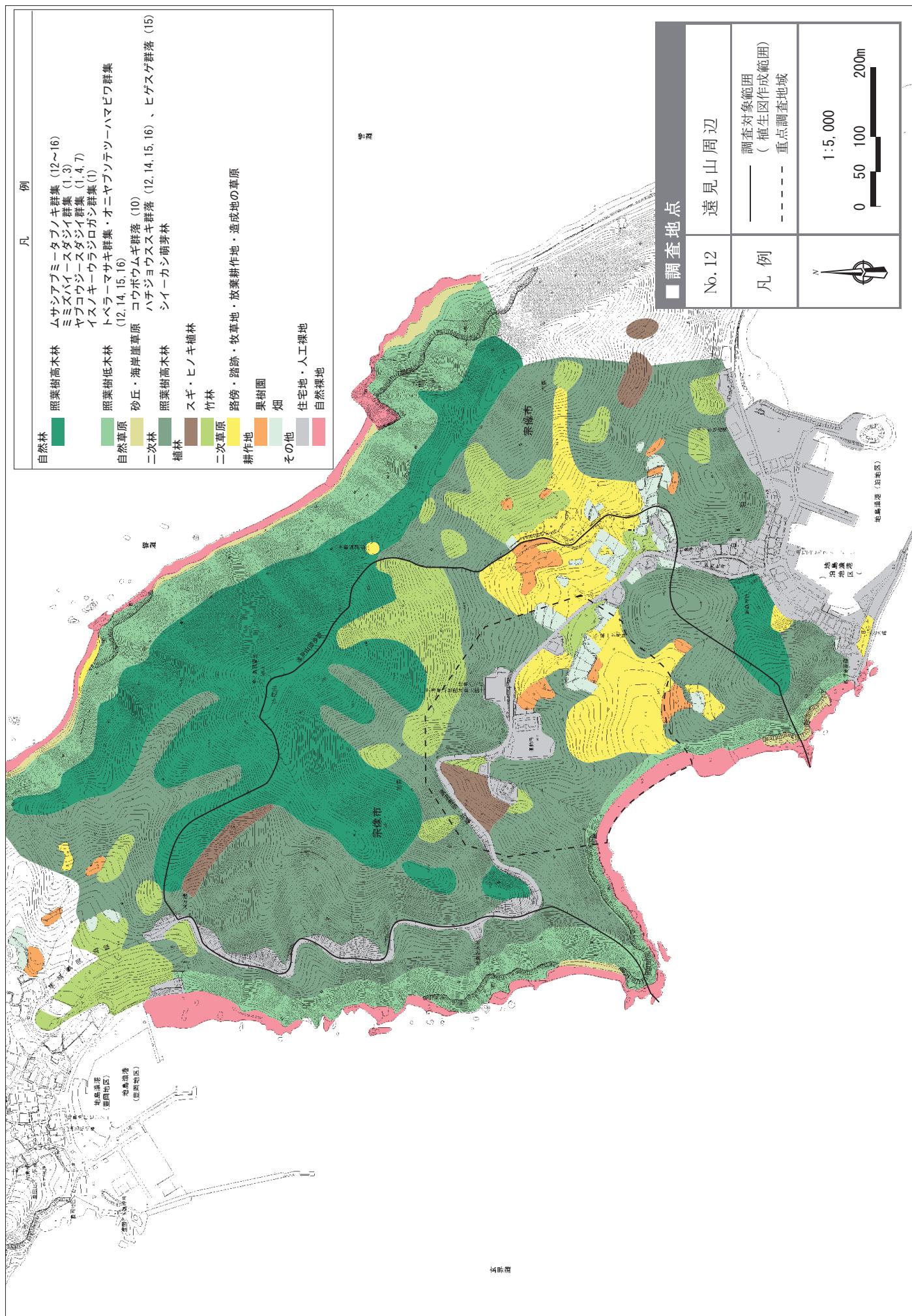


図3-13 宗像市の重点調査地域 (No. 12 : 遠見山周辺)

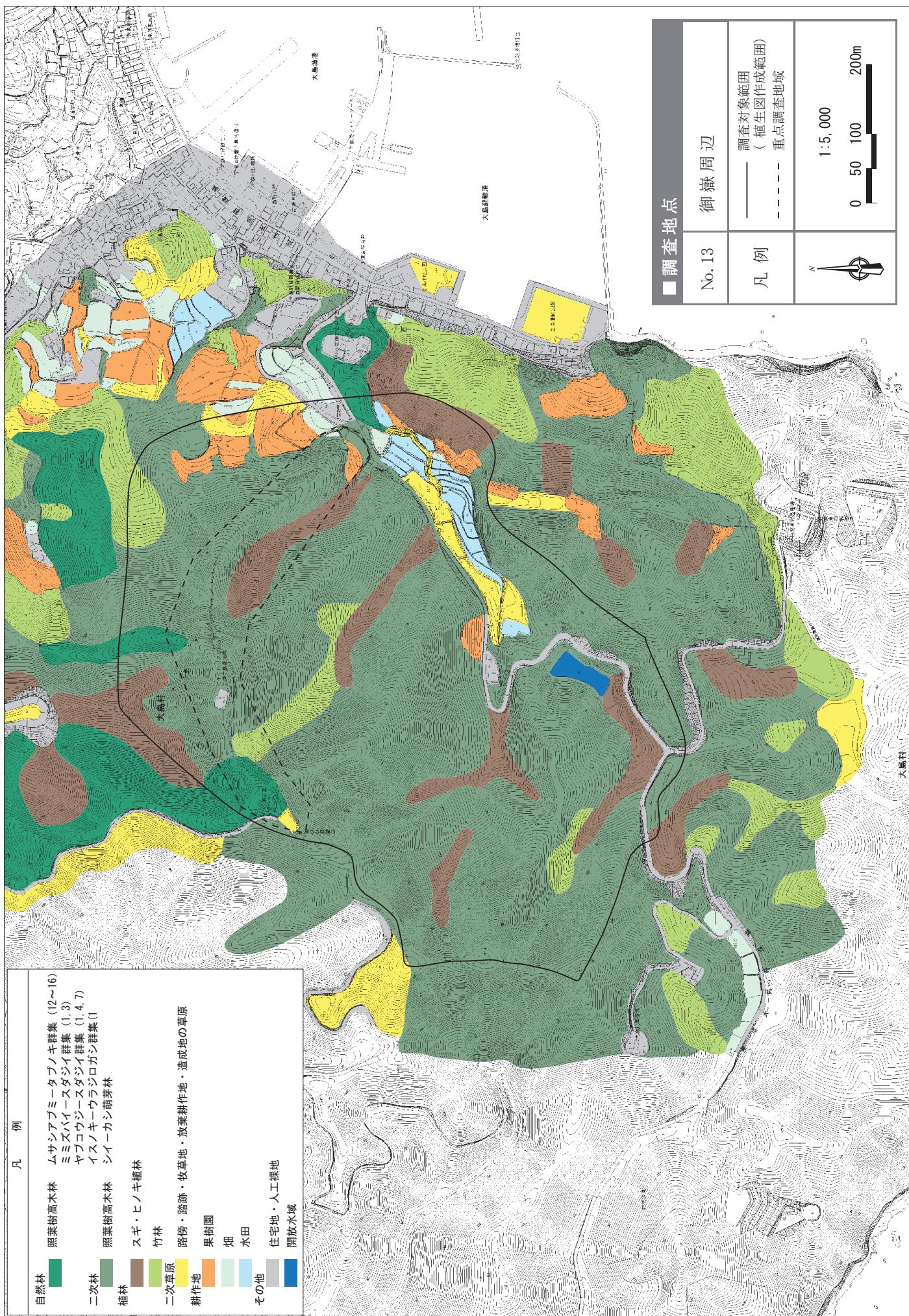


図3-14 宗像市の重点調査地域 (No. 13 : 御嶽周辺)

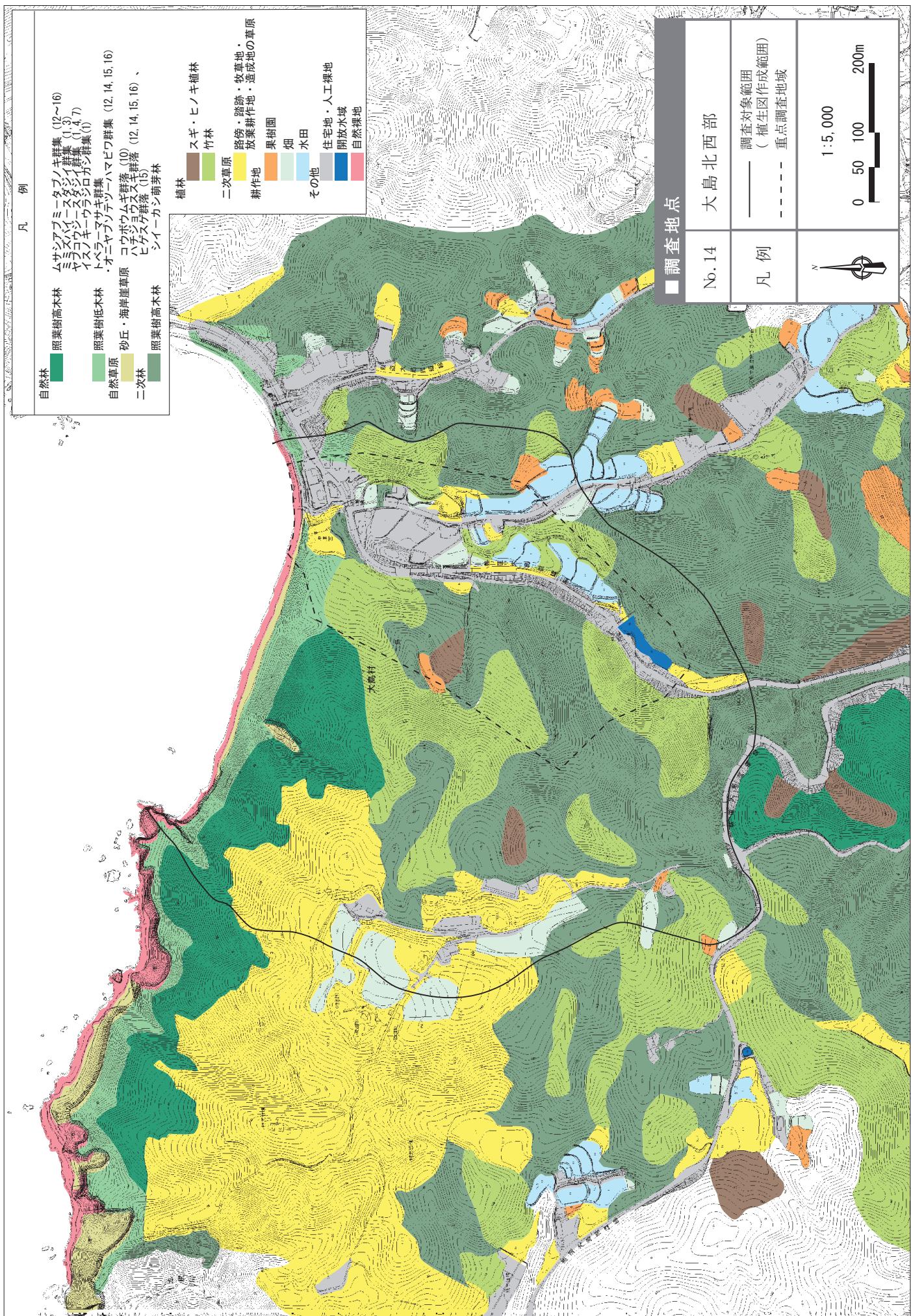


図3-15 宗像市の重点調査地域 (No. 14 : 大島北西部)

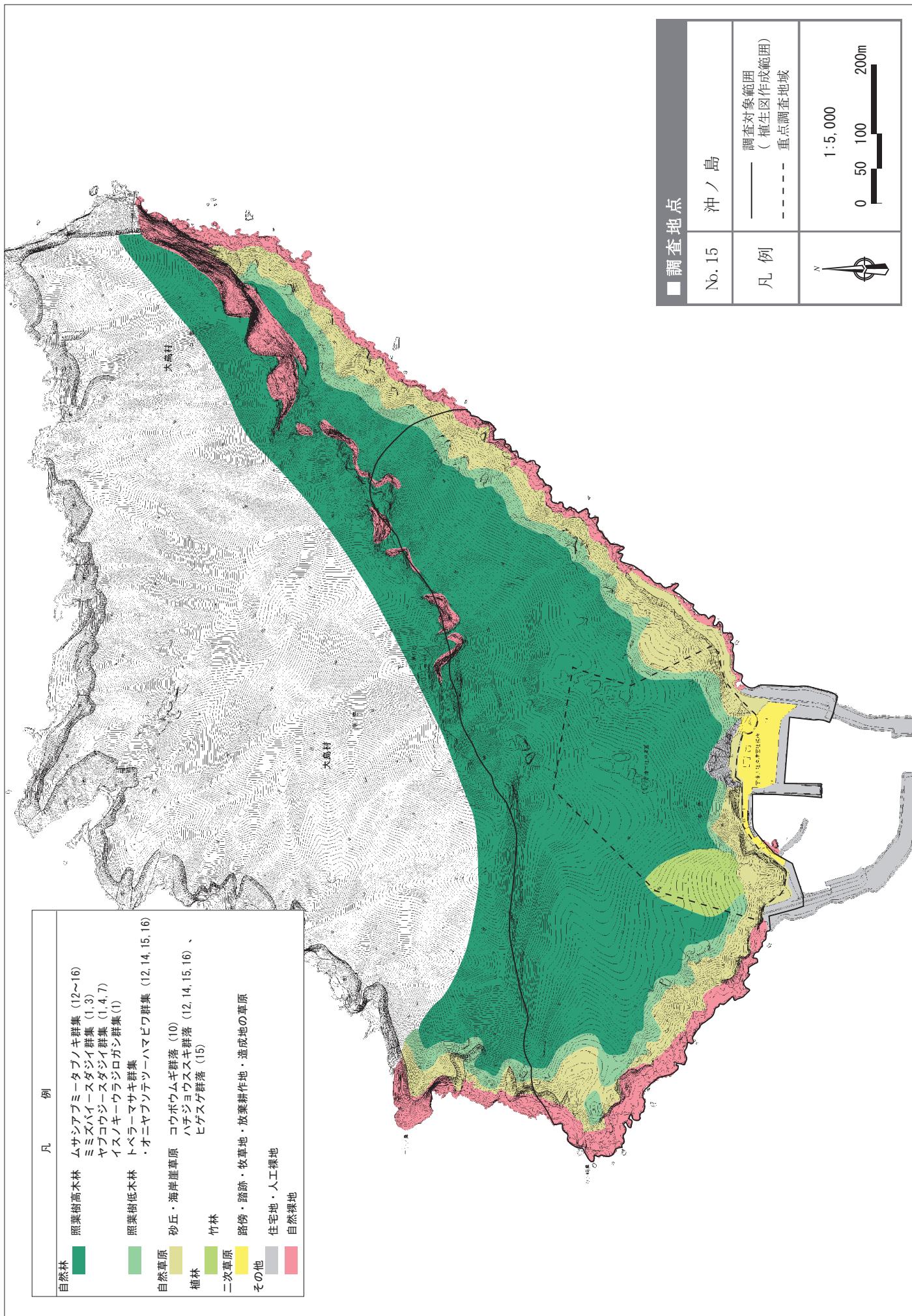
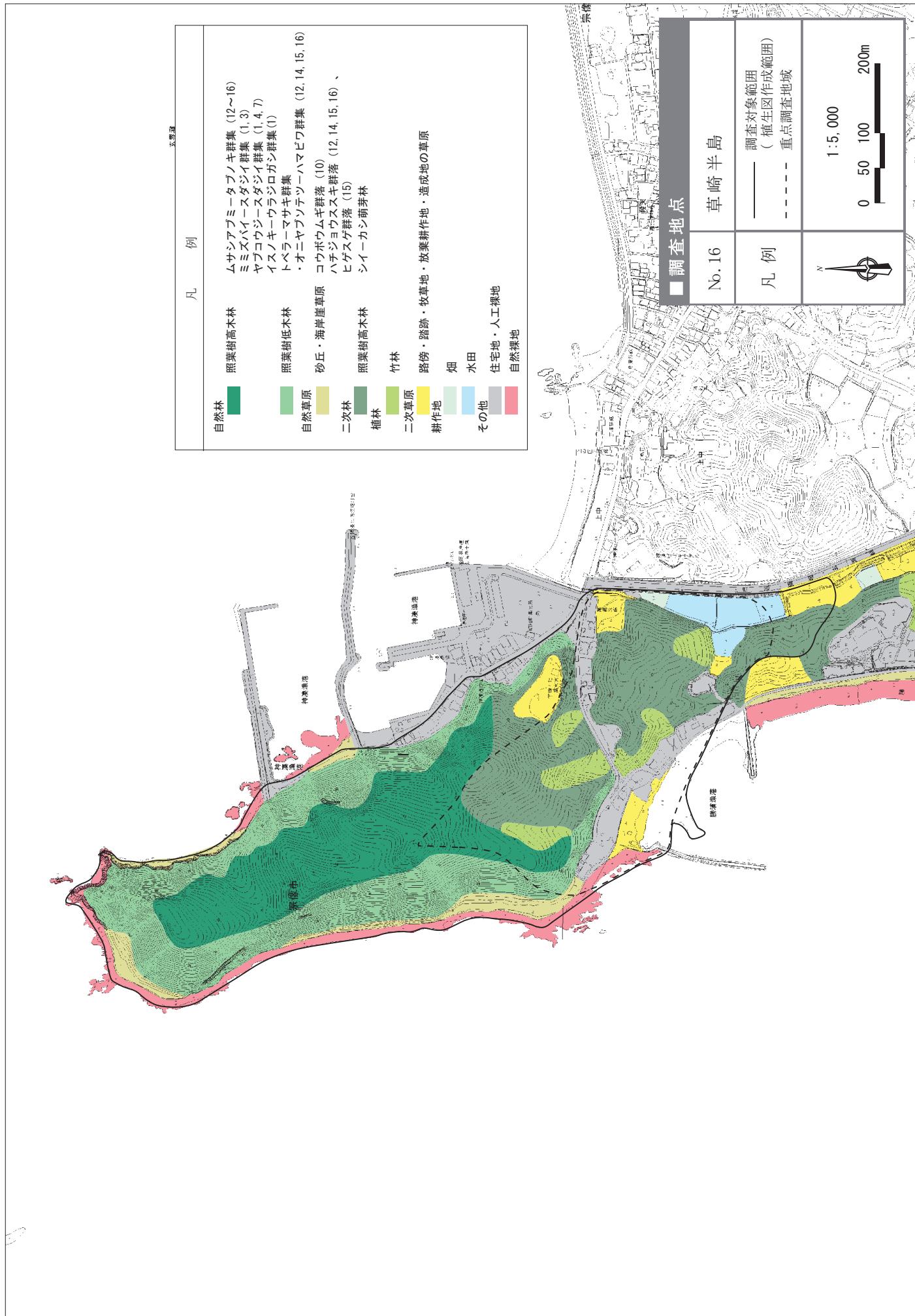


図3-16 宗像市の重点調査地域 (No. 15 : 沖ノ島)



各類型に含まれる重点調査地域及び市域の植生配置等は、以下の通りである。

### 第1類型：里地里山景観構成要素を含むが、海岸性の自然植生及び地形（自然景観構成要素1～3）で特徴付けられる地域

里地里山景観構成要素をほとんど含まない沖ノ島（No. 15）のほか、それを含むが、海岸性の自然草原及び自然林で構成される草崎半島（No. 16）、遠見山周辺（No. 12）、大島北西部（No. 14）、御嶽周辺（No. 13）が該当する。

沖ノ島（No. 15）は、標高約50m付近を境に、下部は島を一周する自然裸地、海岸風衝草原、海岸風衝低木林、上部は照葉樹高木林である。風衝草原のうち、ヒゲスゲ優占群落は本島北西斜面及び小屋島の露岩地帯に、ハチジョウススキ、ヒゲスゲ、キノクニスゲ、ボタンボウフウ、ハマウド等の混生する群落は本島南東斜面の転石地帯に見られる。

照葉樹高木林はタブノキを優占種とする極相状態のムサシアブミータブノキ群集であるが、林内には台風等の強風による小規模な風倒害跡地が点在し、アカメガシワ、カラスザンショウ、ヤマザクラ等の夏緑樹林となっている。この樹林は常に安定していると思われるがちな極相林も、崩壊と再生繰り返していること（動的平衡状態）を示す好例である。

なお、本土の同群集にはシイノキやアラカシ等のブナ科植物が混生しているが、沖ノ島にはそれらは出現しない。また、オオミズナギドリの大群による歩行と高密度の巣穴により、林床植物の発生や存続が抑制されている。

沖ノ島とほぼ同じ植生とその帶状配列がセットで見られるのは、草崎半島（No. 16）主要部、勝島全島、鐘岬（佐屋形山）、遠見山周辺（No. 12）を含む地島北東斜面及び厳島神社境内、大島北西部（No. 14）を含む大島北岸である。大島北岸には県下では稀なマルバニッケイの出現する風衝低木林がある。

自然景観構成要素1～3のうち、いくつかを欠く例には、海岸を含まない御嶽周辺域（No. 13）の御嶽北稜及び東稜、中津宮境内があり、ムサシアブミータブ群集が分布する。中津宮境内の同群集には複数個体のバクチノキが出現し、県下で特異な例となっている。また、風衝草原と風衝低木林は、規模の大小は別として大島、地島の漁港付近を除く海岸沿いに普通に見られる。

なお、大島には3箇所の牧場があり、特異な開放景観を形成している。

### 第2類型：里地里山景観構成要素を含むが、山地自然林（自然景観構成要素4）で特徴付けられる地域

人間活動の大小で地域の景観を区分すると、都市・住宅地→里地・里山（田園）→奥山という系列が考えられるが、この類型には奥山的性格の城山（No. 1）、孔大寺山（No. 7）、許斐山（No. 4）、里地・里山的色彩の濃い名残谷地田（No. 3）、樽見川上流（No. 9）が含

まれる。

奥山的地域における山地自然林（自然景観構成要素4）は、城山（No.1）では南斜面中腹以上と金山へと続く北稜に、孔大寺山（No.7）の宗像側枝尾根及び白山への稜線に、許斐山（No.4）の南稜のほか、重点地区外の名残山の主稜に分布する。

一方、里地・里山的地域の典型例として名残谷地田が挙げられる。そこは大型住宅団地と水田に挟まれた丘陵に位置し、緑の多い住宅地、耕地、果樹園、溜池のほか、かつては生活用材や薪炭材を供給していた竹林やシイーカシ萌芽林、建材供給のためのスギーヒノキ植林、長らく放置されてシイーカシ萌芽林から自然林のミミズバイースダジイ群集に回帰した照葉樹林からなる。類例として、ミミズバイースダジイ群集と同定される自然林を含む樽見川上流（No.9）、吉留の八所宮、イスノキーウラジロガシ群集に同定される吉田の鎮国寺の社寺林とその周辺部が挙げられるが、いずれも規模は小さい。

### 第3類型：自然景観構成要素は皆無に近く、里地里山景観構成要素で特徴付けられる地域

武丸周辺台地（No.2）、多礼貯水池周辺（No.6）、釣川中流・上（No.5）、釣川中流・下（No.8）、釣川下流（No.11）が該当する。

この類型には水域（河川、古くからある農業用溜池、住宅地開発に伴う沈砂池、上水道用の貯水池）があり、自然植生の河川・溜池水生植物群落が生じているが、いずれも小規模であるため、2万分の1植生図では表示できない。

武丸周辺台地は、山地部はスギーヒノキ植林で平野は水田で占められる。多礼貯水池周辺はシイーカシ萌芽林（コナラ・アカメガシワ・ノグルミ林を含む）林、スギーヒノキ植林、竹林、溜池・貯水池等で、釣川中流・上は水田と小規模な樹林で、釣川中流・下は水田で特徴付けられる。釣川下流は水田と集落で特徴付けられるが、部分的に次の第4類型の景観も含む。多礼貯水池周辺を除き、他はいずれも植生の種類が少ない。

このほか、宗像市を囲む境界山地中腹以上は、大面積のスギーヒノキ植林、散在するシイーカシ萌芽林、マテバシイ林（主として湯川山と孔大寺山に分布）、竹林で構成されている。また、山麓部や丘陵は各種二次植生が、釣川沿いの丘陵地域は、植生の少ない大型住宅団地や市街地が優勢であるほか、福津市境丘陵地帯の大穂、用山、田島地区には大規模な果樹園（柑橘類）とその放棄地（多くは草原状態）が顕著である。

### 第4類型：砂丘上のクロマツ植林と里地里山景観構成要素2で特徴付けられる地域

地理的には海岸線を含む点で第1類型に相当するが、地形的には海岸崖と砂丘、植生上は風衝草原・低木林と砂丘草原という差異がある。さつき松原（No.10）と釣川下流（No.11）の一部が該当する。

さつき松原は自然裸地（砂丘）、海岸クロマツ林、水田景観で特徴付けられるが、海岸砂丘草原や宗像市では唯一の塩沼地（ヨシ群落、ヒトモトスキ群落）は線状であつ

たり小面積であつたりするため、2万分の1植生図では表示できない。

クロマツ林は砂丘後背地の集落や耕作地を風、砂、塩の害から守るため（年貢確保のため）、16世紀末頃（小早川藩、黒田藩初期）に大規模植栽が始まり、江戸時代中期に広域にわたって荒廃したことあったが、厳重な管理の下に保護育成してきた。

しかし、近年ではクロマツ林の衰退が見られる。その直接的原因は戦後の数次にわたる松枯病の蔓延であるが、間接的原因为として、高度成長期におけるプロパンガスの普及が落ち葉搔き習慣を衰退させ、その結果落葉落枝が堆積して土壤が富栄養化し、クロマツと競合関係にある照葉樹の発生・成長を考えられる。クロマツは砂丘のような強光・乾燥・貧栄養立地でも生育できるが、陽樹であるため、遷移の進行に伴つて生じる陰樹林（照葉樹林）内では種子発芽はできても成長できず、後継樹が育成されない。

落ち葉搔きは燃料採取が目的であるが、落葉落枝除去による土壤の富栄養化を抑制するともに照葉樹稚苗の除去効果もある。